飛鳥資料館のみどころ（2）

—秋期特別展「古年輪」—

飛鳥資料館では、毎年春と秋の２回、特別展示をおこなっています。今年度の春期特別展は「ASUKA 1/500」と題して、昨年度全国を巡回した「飛鳥・藤原京展」の帰還展を開催しましたが、秋期特別展は「古年輪」と題して、前号でも紹介した年輪年代法に関する展示を10月７日（火）から11月24日（月）の期間（会期中無休）で開催します。

当研究所で古年輪から年代を読み取る年輪年代法の研究が始まったのは、今から23年前のことです。現代の伐採木から近世、中世、古代の建築部材、さらに遺跡から出土する考古遺物の木材の年輪を読み取る地道な作業により膨大なデータが蓄積され、それを解析する研究が続けられました。その結果、今ではヒノキで、現在から約3000年前までの暦年標準パターン（年代を割り出す基準パターン）が作り上げられています。

完成したこの年輪の暦年が正確であることは、滋賀県信楽町の宮町遺跡出土柱根の年輪から読み取った柱の伐採年代が、『続日本紀』に記す紫香楽宮の造営年代と一致したことから実証され、その後の多くの応用事例からその信頼性はゆるぎないものとなっています。

近年、年輪年代法の成果は、マスコミなどで華々しく取り上げられる機会も増えてきましたが、研究の歴史や方法など、その全体像については、まだまだ一般に理解されているとは言えません。秋期特別展では「古年輪」をテーマに、遺跡、古寺の部材資料とともに、その最新の研究成果を広く紹介します。また、特別講演会を下記日程にて開催しますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。　（飛鳥資料館　西山和宏）

＜特別講演会＞

● 10月18日（土）午後２時より　飛鳥資料館講堂
「古寺の年輪」
元奈良国立文化財研究所長　鈴木嘉吉

● 11月１日（土）午後２時より　飛鳥資料館講堂
「年輪の暦」
埋蔵文化財センター古環境研究室長　光谷拓実